

イエス様を前にして、弟子たちはじめ、大勢の人々がイエス様のお言葉を聞いています。そこで、その情景を思い浮かべていただきたいのですが、イエス様はどんな様子でお話をしているのでしょうか。また、イエス様のお話を聞いている人たちはどんな様子でその話を聞いているのでしょうか。そこに人々の笑顔、笑い声はあるのでしょうか。もし私たちがその場にいたとして、私たちはどんな様子でイエス様のお話を聞いているのでしょうか。ただし、それを思い浮かべるにはイエス様の様子を知らなければなりません。御言葉はそれについて何も語りません。ですから、それが分からずに、私たちがここでの情景を思い浮かべるなら、そこには私たちの心の内にあるものが大きく影響を与えることになるでしょう。

さて、そこで、私たちはイエス様のその一言一言を真面目に受け止め、その情景を思い浮かべようとしているわけですが、その際、私たちの心の奥深くに刻みつけられるものがある一つの思いです。それは、イエス様への負い目、さらに言えば、罪悪感のようなものです。それは、強く心を引かれながらも、十分に消化できずにいるからです。ですから、そこからここでの情景を想像するなら、語る者と聞く者との関係性は温かみを欠いたものとなるでしょう。けれども、イエス様は私たちを追い詰めようとしてここではこのようなことを仰っているのではありません。「復讐するな、敵を愛し、迫害する者のために祈れ、天の父が完全であるように完全な者となれ」とのイエス様のお言葉は私たちにとっては確かに厳しいものですが、それは、それに完全に応えることなど私たちにはできることではないと思えるからです。こうして、私たちはイエス様のここでのお言葉に躓くのですが、けれども、イエス様が仰ることは私たち信仰者のあり方そのものでもあるのです。つまり、ここを外して私たちの信仰も私たち自身もあり得ないということです。それは、イエス様がそうあることを私たちに強く求めておられるからです。

ですから、ここでのことは、私たちが

躓くことをイエス様が初めから意図していたとしか思えません。しかし、イエス様がここでこのようなことを仰っているのは、私たちを御言葉の上に登らせ、はしごを外すためではありません。あらゆる聖書の御言葉が私たちにとって一つの確かな方向性を示すように、御言葉が私たちに負わせるその傷は時に避けられなないものでもあるのです。なぜなら、傷を負えばこそ、私たちは一つの間違いのない方向へと導かれるからです。ですから、そういう意味では、傷を負うことは、真理を追い求める私たちにとっては大事なことです。そこで、先週、新聞で紹介されていた鶴見俊輔さんの言葉を思い起こすのですが、ある対談の中で、鶴見さんはこんなことを仰っていたそうです。それは、「真理を方向感覚と考える。その場合、間違いの記憶を保っていることが必要なんだ」との言葉でもありますが、つまり、真理の追究のためには、間違いを簡単に消し去るのではなく、おいそれとは消せないものとして自分自身に刻みつけることが大切であるということです。ですから、それには、それがどんなに痛かろうが、間違いと正面から向き合う覚悟と意気込みが求められます。それは、この痛みと向き合わずしてその先が備えられることはないからです。そして、私たちに聖書の御言葉がまさにそういうものであり、ですから、この傷だらけの関係性の中にこそ、私たちとイエス様、私たちと神様の関係性が現されていると言えるのです。つまり、私たちが傷だらけになりながら、なお、御言葉に聞いていこうとするから、私たちには一つの間違いのない道が示されるのです。ちなみに、鶴見さんのお母様は熱心なクリスチャンであり、彼自身は信仰が与えられることはなかったのですが、真理を方向感覚といっているところに、また消し去ることのできない何かを感じざるを得ません。

ということで、この日私たちが負ったこの傷こそが私たちの望むべき将来をはっきりと指し示していると言えるのですが、その将来とはつまり、ここでイエス様が仰る「天の父の子となるため」、「完全なものとなりなさい」ということ

です。そして、傷を負った私たちがその先を目指し歩み続けることができるのは、イエス様によって罪赦され、癒やされるからでもあります。その私たちの向かうところが、今申しました父なる神様がいます。天の御国でもあります。ですから、そういう意味では、私たちが神様を信じ、また、イエス様を信じるといふことは、傷を負い、痛い目に遭って終わるだけではありません。そこにはきちんとしていた神様の目的があり、そのためにも私たちに越えなければならぬものがあるということです。そして、越えるべきものの一つが罪深い自分自身でもあります。そうであるからこそまた、私たちはイエス様の仰ることに応えないわけには参りません。それゆえ、復讐してはならない、敵を愛し、虐げるものために祈れ、そして、完全なものとなれ、と、これらのことが、私たちに強く求められている以上、私たちはそれにきちんと答えていかなければならないのです。ただし、このイエス様のご命令を私たちは誤解してはなりません。これらのことはできない者に無理矢理やらせようとし、ここでイエス様がこのようなことを仰るわけではないからです。もし、イエス様が端からできないと分かっている、敢えてここでこのようなことを仰っているとしたら、イエス様はできない私たちのことを嘲笑っていることにもなりません。しかし、勿論、そういうことではありません。

十戒、律法に記されている「汝、何々せよ、何々するなかれ」と言われていることの意味合いは、そもそものところで能力のない者への強制、無理強いではありません。「何々せよ、何々するなかれ」との戒めは、「あなた方はこういうことをするはずだ、あなた方がこんなことをするはずがない」という、私たちに對する神様の信頼に基づくものでもあります。ですから、この一つの枠組みから外れなければ、私たちに一定の自由が約束されてもいるのですが、ところが、そこから一段ハードルを上げたのがイエス様でもありました。それは、一定の自由が約束されているのをいいことに、神様に対する私たちのあり方に私たち自身が限界を設けようとするからです。つまり、これはここまで、これくらいでいいだろうと、自分の考えに従ってその行動をコントロールしようとするのです。ただ、そもそものところでは、神様に対する私たちのあり方に限界はありません。御旨にお従いすればこそ、そこに私

たちの信仰は現され、そして、そこに私たちの命が輝くことにもなるからです。従って、ここでイエス様が仰る、復讐しないこと、右の頬を打たれたら左の頬を差し出すこと、求める者にはすべてを与えること、そして、敵を愛し、強いたげる者のために祈ること、これらのことをイエス様が強く求めておられるのは、これらのことが私たちにできないことではなく、できることでもあるからです。少なくとも、イエス様はそう強く信じているのです。このことはつまり、イエス様がハードルを一段高くしたのは、私たちに對する信頼がそれほど深いものでもあるからです。ところが、私たちはどうか。その信頼に応えられないだけでなく、それができない、できるわけもない、と言い訳ばかりを口にするのです。では、どうしたら、私たちにそれができるようになるのか。まさに、ここに、イエス様がハードルを一段階上げた理由があるように思うのです。

ともすれば自分で限界を定め、傷つかないところに身を潜めようとするのが私たちでもあるのでしよう。けれども、自分が定めた限界に達しない人を見ると今度はどうか。律法主義と言われていることは、できるできないと言うことに拘り、ある意味で、信仰を盾に取って自らの殻に籠もることです。それは、できるところに止まっている限り、安全安心は保証されていると思えるからです。けれども、そこに籠もり続けている限り、日々積み重なる罪が赦されることもありません。ですから、私たちが寛容さを失うのは、罪を罪として自覚できないだけでなく、自分という小さな世界に甘んじているからです。なぜなら、ここでイエス様が「背を向けてはならない」と仰るように、殻に籠もり続ける私たちの姿勢は、神様の限りない赦し、愛を拒むことでもあるからです。それゆえ、私たちのそうした姿勢は、自らの将来を閉ざすだけでなく、自分をも人をも幸せにするにはありません。なぜなら、仮にそこがその人にとってどんなに居心地のいいものであっても、罪をそのまま放置し、赦されないままに終わりを迎えたならば、結局は与えられた命を粗末にしているに過ぎないことにもなるからです。ですから、ここでイエス様が仰っていることをすべての人々が実現できれば、世界中のすべての人が幸せに年を重ねていけるのは間違いありません。では、どうすれば、私たちは、やられたらやり返さず、敵を敵とも思わずに愛し、虐げる者のた

めにも祈り、結果、完全な者となれるのでしょうか。

そこで、真面目な私たちはできるとイエス様が仰る以上、できるようにならなければならぬと考へます。そして、それは、イエス様ができると思っているわけですから、そう思うのが人として当然のことです。けれどもどうでしょうか。この試みに完全に成功したものが果たしてどれだけいると言えるのでしょうか。ただ、全くいないわけではありません。私たちが知る限り、ステパノ然り、コルベ神父然り、教会の長い歴史においては、イエス様が完全な者となりなさいと仰ることを誠実に実践した人たちはいるのです。では、私たちはどうか、ほとんどの人たちが挫折し、その罪の意識にさいなまれることにもなるのですが、では、そこで私たちが知らされるものはどういふことなのでしょう。罪人である私たちがその罪ゆえにイエス様に躓き、傷つくことは避けられないとしても、それでもイエス様のお言葉に聞いていくことができるのは、私たちには神様の無限の赦しを与えられているからです。それゆえ、そこで知らされるものは、愛の大切さとか、命の尊さとか、そういう曖昧なものではありません。

私たちが躓き、傷つく中で知らされることはもっと具体的なものです。まただから、私たちはイエス様が求めることに誠実に応えたいと思ふのです。更なる傷を負うことを覚悟して、やってみようと思ふのです。そして、それは、私たちにその自信があるからではありません。できないことを誰よりもよく知っているのが私たちであり、そこで、私たちがなやってみようと思ふのは、このイエス様のお言葉の上に自分を立たしめるからです。つまり、ここから逃げずに立ち続けようとするからです。ただし、それは、同時に、躓き、傷を負うということです。けれども、この繰り返しの中で、私たちは知るのであります。イエス様が私たちの近くにあり、このイエス様ゆえに神様も私たちの近くにおられるということ、です。従って、私たちが何かを知ることの中心にあるものは、この神様とイエス様との近さでもありますが、それゆえ、私たちの身に起こることのすべてはこの神様とイエス様との近さからその意味が与えられることにもなるのです。ですから、そう考えると、ここでイエス様が仰っていることの真意は分かりにくいものではないです。

敵とはつまり、そのイエス様が私たち

に与えてくださった者であり、それは、敵と思えるその人ともイエス様は直ぐ近くにおられるからです。従って、その人が敵か味方かということではなく、その人と私たちとは主にあっては互いに近い存在であるということ、つまり、その人は主にある隣人であり、愛せない人ではなく、愛すべき人、愛さなければならぬ人、そういう者であるということ、です。ですから、その人に私たちが背を向けるということは、イエス様に背を向けること、イエス様に背を向けるということは神様にも背を向けるということなのです。しかし、私たちにとって、それをやり続けることはやはり容易なことではありません。私たちがイエス様のお言葉の上に立ち続けたとしても、そのことを相手が理解しているかどうかはまた別の問題であるからです。ですから、そのためにまた、私たちは深く傷つくことにもなるのですが、ただだから、この分かってくれない存在に、私たちは敵というレッテルを貼って、できる限り近づこうとはしないのです。それは、もうこれ以上自分が傷つきたくないからでもあります。しかし、そうであるからこそ、イエス様は、私たちとイエス様の近さゆえに、すべてのものとの関係を築き、それを維持し続けることを求めるのです。そして、そのために私たちに求められていることが愛するということでもあります。ただ、この愛するということ、私たちが誤解しないように努めなければなりません。それは、愛するということは相手の言いなりになることでもなく、また、自分の思い通りにすることでもないからです。

近いということは相手との間にまったく距離がないということではありません。もし、私たちが愛というものを相手との距離がまったくないものであると理解するならば、それは明らかな間違いです。なぜなら、イエス様が私たちに対してあれこれ語るのとは、しっかりと距離を取った上でのことでもあるからです。それはまた、分かっているということが距離がないことではなく、きちんと相手との距離が取れていることでもあるからです。それゆえ、私たちが愛をもって関係を築くためには、この相手との適度な距離が必要なのです。ですから、私たちがやられたらやり返し、また、意のままにならないものをすべて敵と断じるのは、この適度な距離がつかめていないからでもあります。そこで、この適度な距離感について、ある人はそこにイエス

様を置いてこう私に説明してくれました。人と人との間にあるのがイエス様であり、私たちが近づきすぎればイエス様は少し距離を置き、また、遠くなれば距離を縮めると、イエス様を中心とした愛の関係性と適切な距離感について、その人は私にそのように説明したのですが、ですから、そう考えるなら、私たちが失敗を繰り返しつつその都度見つけるものは、人と人とをつなぎ合わせるイエス様の姿ということになります。つまり、イエス様が適度な距離感を生み出せばこそ、結果、私たちは関係性を構築し、互いに天の御国へと共に導かれることになるということです。

ところが、それが分かったとしても、それでも私たちは安心することができません。それは、イエス様が私たちのことを信頼しているにも関わらず、私たちはイエス様に自分自身を委ね、投げ出すことができないからです。ですから、それは、情けなく、悲しいことでもあります。ただ、私たちの身に備わっているものとはそういうものであり、どうしようもありません。そして、それが聖書が罪と呼んでいるものの本質でもあります。従って、私たちの中で見られる信仰ゆえの突飛な行動は分からない話ではありません。不安を解消しようとして無理に無理を重ねる行動には必ず嘘と誤魔化しがあります。私たちの多くがそのことをいぶかしく思うのはそのためです。ですから、信仰を盾にとって人を責めるときには自分が無理をしていないかどうかをしっかりと顧みる必要があるのでしょうか。しかし、顧みるだけでは何も話が前に進みません。そこで、完全なものとなるためにはなんとか歯車を前に進めなければならぬのですが、それがなかなか前には進んでくれない、私たちが無理をしてしまう原因はここにあるようにも思います。しかし、そこにはまた私たちの誤解があるようにも思うのです。

イエス様が仰るところは「完全な者になりなさい」ではなく、「完全な者となりなさい」ということです。そして、これについて、ある先生はこう仰っておりました。「完全であるとは神様に対して心が割れていないということである」と。つまり、神様に対して一途であるということでもあります。神様の御旨に一途であったのが私たちの主、イエス様でもありました。従って、イエス様が仰っている「完全な者となりなさい」ということは、イエス様ご自身がそう仰っていると

いうことです。しかし、そう言われて腰が引けるようではいけません。そこで、少し前に一緒に聞いたイエス様のお言葉を思い出していただきたいのですが、そもそものところでは、私たちはどういう者なのか、それは海の物とも山の物とも、どちらとも言えないものではありません。イエス様がそこではっきり仰っていることは、私たちが「地の塩であり、世の光」であるということであり、ところが、私たちの目から見れば、私たち自身も、また、周辺にある人々も、様々いろいろ、いろいろな姿に見えるのです。けれども、その私たちのことをイエス様は「地の塩、世の光」と仰るので、それは、私たちがもうすでにそのようにされているからです。それは、私たちが「地の塩、世の光」としてこの世に生まれ、この世に生き、そして、御国へと導かれているからです。

ですから、「完全」ということが神様に心が割れていないことだと仰ったある先生は、「完全」とは悔い改めであるとも仰っておりました。つまり、「完全」であるとは一点の曇りもないことではなく、非はあり、問題はあるのです。それゆえ、私たちはこの問題を誤魔化さずに神様の御前でお詫びするしかないのです。けれども、やってしまったことに負い目を感じながらも、誠心誠意神様にお詫びしたなら、後は前を向いて歩いて行けばいいのです。なぜなら、そのとき私たちはイエス様を見つめ、イエス様に倣い、イエス様と歩みを共にしているからです。ですから、鶴見俊輔さんが仰っていたように、そういう意味で悔い改めとは、私たちにあっての方向感覚であり、私たちが方向を誤らないためにも、私たちは自分自身の間違いや過ちを、赦されたという事実と共に自分自身に刻みつけなければならぬのです。そうすれば、今が私たちの目にどのように映ったとしても、私たちの将来はイエス様が共にまし、私たちのことを守り支え導いてくださっているわけですから、イエス様がここで語る戒め通りに私たちも整えられ、また世界も整えられていくことになるのです。ですから、この希望をもって、これからも聖書の御言葉の中に大胆に入り込み、イエス様のそのお言葉に聞いていく私たちがでありたいと思います。祈りましょう。